

編集後記

皆様は「紀要」ということばを聞いて、どのようなイメージを持つでしょうか？「紀要」の論文なんて、筆者と編集者しか読まない、とも言われています。「紀要」というのは、「何か書けば載せてもらえる」とか「業績稼ぎのために適当なものを出しても大丈夫」のようなイメージを持たれている面があることは否定できません。

これに対して、この『国際交流基金日本語教育紀要』に投稿された論文は、査読によって、厳密に審査されます。今回の紀要では、応募17本の中から、基金外部から委嘱した委員の先生を含む編集委員会による査読を経て、最終的に9本の論文・報告が採用されました。最初の段階で「条件付き採用」となったものも、初回改稿の段階で再査読が行われ、その時点で「不採用」とせざるを得なかったものもありました。再査読を経て「採用」となった論文・報告も、査読者と執筆者の間でやり取りを数回重ね、改稿、修正を繰り返したうえで、ここに掲載された最終稿の形になっています。

この『国際交流基金日本語教育紀要』に採用された論文・報告は、このような査読のプロセスを経たものであるため、内容的にもある程度の水準を維持しているものと自負しています。今号で採用された論文・報告は、テストやコースの開発、教師研修など、内容も多岐に渡り、また国や地域に関しても、世界中の事例があります。これらの論文・報告は、世界各地で日本語教育に携わる皆様にとって、様々な形で参考になるものであると思っています。この紀要が、世界の日本語教育に関する質の高い実践として、読者の皆様のお役に立てることを願っています。

磯村 一 弘（『国際交流基金日本語教育紀要』編集委員長）